



**Data**

監督・脚本：アスガー・ファルハディ

出演：ベレニス・ベジョ/タハール・ラヒム/アリ・モッサフア/ポリヌ・ビュルレ/ジャンヌ・ジュスタン/エリエス・アギス/サブリーナ・ウアザニ/バク・カリミ/ヴァレリア・カヴァッリ

## 👁️👁️ みどころ

今や、複雑に入り組んだ人間ドラマの描き手として世界のトップに立ったイラン人監督アスガー・ファルハディが、『彼女が消えた浜辺』（09年）、『別離』（11年）に続く問題作を！

離婚、再婚、不倫、移民。フランスではそれが多くの問題の根源にあるが、まさに本作はそんな人間たちのドロドロ感が満載！時々見せる妻のヒステリック性には辟易だが、後半からクライマックスにかけて展開される、ある女性の自殺未遂の「謎解き」は推理小説以上のミステリー性に満ちあふれている。

もっとも、ストーリーの本筋とは一見無関係なあのラストシーンは、どんな脈絡で捉えればいいのか？その賛否は？また、これはハッピーエンド？それとも・・・？



### ■□■あのイラン人監督に三たび注目！■□■

本作を監督・脚本したのは、アスガー・ファルハディ監督。そう聞いてもすぐにピンとこないが、『彼女が消えた浜辺』（09年）（『シネマルーム25』83頁参照）でベルリン国際映画祭銀熊賞（監督賞）を、『別離』（11年）（『シネマルーム28』68頁参照）でベルリン国際映画祭金熊賞、銀熊賞（女優賞）、銀熊賞（男優賞）を受賞し、アカデミー賞で外国語映画賞を受賞したイラン人監督。そう言われたらピンとくるはずだ。すると、本作も最近注目を集めているイラン映画？と思ったが、いやいや、そうではない。本作はイランを舞台として現代社会の縮図を描いてきたアスガー・ファルハディ監督が、はじめて外国にカメラを据えて挑んだ意欲作だ。

とは言っても、冒頭、空港に登場する本作の主人公アーマド（アリ・モッサファ）のひげもじゃの顔を見ると、彼はどう見てもイラン人？さらに、それを迎えに来ている女性マリー＝アンヌ（ベレニス・ベジヨ）の濃い顔立ちを見ると、これもイラン人？一瞬そう見えたが、アスガー・ファルハディ監督作品らしく、そこらあたりがややこしい。少なくともマリーを演じている女優が『アーティスト』（11年）（『シネマルーム28』10頁参照）でセザール賞主演女優賞受賞、アカデミー賞助演女優賞にノミネートされた女優と聞けば、イラン人ではないはずだ。そこで、パンフレットを調べてみると、彼女は1976年にアルゼンチンで生まれ、3歳の時にフランスに移住した女優らしい。『ビフォア・ミッドナイト』（13年）（『シネマルーム32』未掲載）は、空港に降り立ったジェシー（イーサン・ホーク）とこれを出迎えたセリーヌ（ジュリー・デルピー）の2人が車の中で交わす会話からストーリーが始まったが、本作もそれは同じ。もともと、『ビフォア・ミッドナイト』の会話はとにかく長く、理屈っぽいのが特徴だったが、本作の会話はちくはぐさが特徴。また、互いに苛立っていることがよくわかる。

『ビフォア・ミッドナイト』はとにかくよく喋る夫婦の会話劇を核として映画が作られていたが、本作はいろいろなストーリーが少しずつ小出し（？）にされてくるから、なかなか全体像がつかめない。そもそも、マリーの運転する車で空港を出発したアーマドとマリーは一体どこへ向かっているの？そして、そもそもアーマドは何をするために、飛行機に乗ってこの空港に降り立ったの？

## ■□■ホテルの予約は？なぜ家に？この男の子は誰？■□■

弁護士の仕事の出発点は、依頼者の説明と資料から、膨大な事実のうち紛争解決のために必要と判断される事実を引き出し、整理することにある。40年間培ってきたそんな弁護士の「習性」からすると、本作に見るアスガー・ファルハディ監督のやり方は小出し過ぎて少しイライラしてくる。しかし、そんな弁護士の目を持っていなくても、スクリーン上の展開を少し我慢して見ていれば、アーマドは離婚の手続をするために今パリの空港に降り立ったことがわかるはずだ。ところが、アーマドからホテルを予約しておいてくれと頼まれていたにもかかわらず、マリーはホテルを予約していないこと、これからアーマドを車に乗せたまま娘のリュシー（ポリヌ・ビュルレ）を学校に迎えに行き、その足で一緒に自宅に戻ろうとしていること、がわかる。また、この車は自分のものではなく、知り合いから借りたものであることもわかる。ところが、リュシーの学校に着くと、リュシーは既に学校を出て帰ってしまったらしい。また、自宅に到着すると、庭では下の娘のレア（エリエス・アギス）が遊んでいたが、彼女と一緒に遊んでいる同じくらいの年頃の男の子は一体誰？マリーがアーマドのホテルを予約していなかったのは、以前にアーマドのために段取りしていたのにアーマドが一方的に予定を変更したことがあるため、今回もそうかなと思ったためらしいが、それって少しヘンな理屈では？さらに、今日（から）はアーマドがこの家に泊まるため、マリーは男の子のフアッド（ジャンヌ・ジェスタン）と一緒に

にアーマドを2階の2段ベッドに寝かせようとしているようだが、その前に、この男の子をちゃんとアーマドに紹介するべきでは？

## ■□離婚、再婚、不倫、移民。それが問題の根源！！■□

私が衝撃を受けた近時のフランス映画『17歳』（13年）と、『アデル、ブルーは熱い色』（13年）の評論で書いた（『シネマルーム32』掲載予定）ように、フランスは離婚、再婚、不倫、移民がややこしいから、本人はもとより、その子供たちも大変だ。



◦ Memento Films Production - France 3 Cinéma - Bim Distribuzione - Alvy Distribution - CN3 Productions 2013

フアッドとの話の中でアーマドは少し事情が飲み込めてきたようだが、マリーは今、クリーニング店を営む男サミール（タハール・ラヒム）と三度目の結婚（同棲）生活をしているらしい。また、フアッドはサミールの息子だが、この家の中で生活しているフアッドとマリーはムチャ仲が悪そうだ。さらに、ここで私にわかったのは、長女リュシーも次女レアもアーマドとマリーの子供ではなく、マリーと前夫との子供ということだ。

便宜上、ここでややこしい人間関係を明らかにしておく、次のとおりだ。

- ①マリーが今住んでいる家はパリ郊外にあるが、離婚した前夫はベルギーのブリュッセルに住んでいること。
- ②サミールはマリーの新しい恋人だが、サミールには（まだ離婚していない）寝たきりの妻セリーヌがいること。
- ③4年ぶりにテヘランからパリに戻ってきたアーマドは、かつてフランス人の妻マリーと結婚したもののフランスでの生活にどうしても馴染めず、ノイローゼになって家を飛び出しテヘランに戻ってしまったこと。

今回アーマドがテヘランからパリに戻ってきたのはマリーとの離婚手続きをきちんとするためだが、それならそれを事務的に済ませばいいだけでは？本作の中にも出てくる家庭裁判所での離婚調停成立の様子を見ていると、弁護士の私はすぐにそう思うてしまうが、それではアスガー・ファルハディ監督が本作で目指した、複雑でドロドロした人間関係から見える人間ドラマにならないらしい。本作前半の揉め事の焦点は、第1にサミールの息子フアッドとマリーとの仲の悪さ、第2にマリーの長女リュシーがマリーのサミールとの再

婚に猛反発していることになる。しかし、『17歳』でも『アデル、ブルーは熱い色』でも同じだったが、離婚、再婚、不倫、移民というややこしい人間関係の中にあれば、そんな風に問題が噴出するのはやむをえないのでは・・・。

## ■人間感情のドロドロ感が満載！ その1 ■

本作の導入部から中盤、そしてクライマックスを通じて、アーマドの話しぶりはどんな場面でも男性らしく（？）理性的だし、対応の仕方も理性的。それに対して、マリーの方は時としてヒステリックさが目につく。その最初は、ペンキをこぼしたことをマリーから怒られたフアッドが「父親の家に帰る！」とぐずり始めると、それをヒステリックに怒鳴りつけたうえ、部屋の中に閉じ込めてしまうこと。もちろん、マリーも多くの場合はアーマドと理性的に話し合いをしているし、リュシーが自分との間でうまくいっていないことについてアーマドに娘の気持ちを聞いてくれと頼む姿を見ていると、マリーもそれなりに理知的な女性のはず。

しかし、私がマリーをずるいなと思うのは、サミールの子供を身ごもっていることをさっさとアーマドに知らせず、ある微妙なタイミングの時にはじめて告白することだ。また、マリーのヒステリック性が後半一気に爆発するのは、アーマドがリュシーに対して母親のマリーが妊娠していることを教えたことに対してだ。これによってリュシーが行方不明になってしまうと、マリーは無茶苦茶アーマドを怒鳴りまくるが、それは筋違いでは・・・。さらに、アーマドの努力のおかげでやっと家に戻ってきたリュシーを無茶苦茶怒鳴りつけて再度家から追い出してしまうヒステリックさも尋常ではない。

このように、アスガー・ファルハディ監督が本作で描き出す人間関係はとにかく、ドロドロ感でいっぱいだ。そのため、かなり疲れるところもあるが、そこは辛抱しなければ。だって、後半には「不倫」というテーマで、もっとドロくさい人間関係が登場してくるのだから・・・。

## ■人間感情のドロドロ感が満載！ その2 ■

後半からクライマックスにかけての更なるドロドロ感のテーマは、サミールの妻セリーヌが植物状態になって病院に入院しているのは、うつ病のせいではなく、自殺未遂を起こしたためらしいことをめぐるミステリー。その自殺未遂は、夫サミールとマリーとの不倫が原因だったらしいから、話はこみ入ってくる。そして、本作後半は心理ドラマながらミステリー性を急速に強めてくるが、それについてもチラホラと暗示されるだけで、何が真相かが明確にされることはないから、観客はスクリーン上から一瞬たりとも目を離すことができないことになる。

マリーの次女のレアはまだ幼いが、長女のリュシーは年頃だから、アーマドは精一杯彼女を大人として扱っていることがよくわかる。しかし、思春期の女の子の心理や行動は不安定だから、ずっと後になってリュシーが「告白」したように、マリーとサミールの（不倫）関係を妻にメールで知らせたのがリュシーだとすれば、サミールの妻が自殺に至った

直接の原因は、リュシーのメールにあるのでは？もし、そうだとするとリュシーの責任は重いことになるが、さてその真相は・・・？

日本では、東野圭吾の推理小説が大人気だが、韓国ではそれ以上らしい。確かに、東野圭吾に限らず、推理小説ではいくつかの伏線が仕掛けられ、どれがホントでどれがウソかを含めて慎重に読み解くことが大切だが、さて、こんなリュシーの「告白」はホントのこと？それとも、思春期の少女特有のハツタリ・・・？

## ■□■人間感情のドロドロ感が満載！ その3■□■

名探偵・金田一耕助や明智小五郎ですら、時として「読み違い」をすることがあるのはやむをえない。そう考えれば、誠実ではあっても、決して名探偵ではないアーマド、しかも4年ぶりに戻ったばかりでほとんど事情がわからないアーマドが、いくらマリーやリュシーから事情を聞いたり、サミールから情報を集めたとしても、サミールの妻の自殺未遂の原因を解明することができなかったのは仕方ない。

本作は130分の長尺になっているが、その原因の一つは、終盤になってからアーマドの旧友で、今はイタリア料理店をやっている男シャーリヤル（ババク・カリミ）とその妻ヴァレリア（ヴァレリア・カヴァッリ）を登場させてくること。シャーリヤルはアーマドが心から腹を割って話せる友人であることがよく描かれているが、家を飛び出してしまったリュシーがブリュッセルにいる実の父親のもとへ行かず、このシャーリヤルの家に行ったことから、彼らの役割が重要なものになってくる。

さらに、最後に大きなカギを握る人物が、アラブ系の移民としてサミールの店で働いている女性従業員ナイマ（サブリナ・ウアザニ）だ。ナイマはクリーニング店の顧客がクリーニングに出したドレスにシミがついていたと文句を言ってきた事件の中で、サミールの妻セリーヌがとった異常な行動が自殺未遂の原因だと証言していたから、もともと本作途中からの謎解きに大きな役割を果たしていたが、さてその真相は？リュシーがサミールの妻にメールを送ったことが事実だとしても、リュシーはサミールの妻のメールアドレスを誰から聞いたの？サミールの妻が夫の不倫を知ったらショックを受けるのは当然だが、その不倫の相手はマリーだと知っていたの？ひょっとして、クリーニングに出したドレスのシミ騒動でサミールが一方的に妻を非難し、ナイマの肩を持ったことによって、ナイマを疑ったのでは？日常的に多くの時間を共に過ごす社長と従業員が、妻に隠れて不倫するのはよくある話だ。そして、そういう目で見れば、ナイマもそれなりに若くていい女・・・？

本作後半からクライマックスにかけては、そんなこんなのドロドロ感が満載となるうえ、ミステリー色が強まり、何が何だかわからなくなっていく感も・・・。

## ■□■ラストになぜ寝たきりの妻がスクリーン上に？■□■

サミールの妻セリーヌが植物状態で寝たきりになっていることは、本作のミステリー色

に満ちたストーリー構成上大切な事実。しかし、それは必ずしもスクリーン上に見せる必要のないものだから、私はラストまでセリーヌの姿はスクリーン上に登場しないと思っていたが、時間が2時間を過ぎようとするあたりから、サミールの気持ちの上でサミールの妻セリーヌのウエイトが次第に大きくなっていくことがわかる。つまり、サミールの子供を妊娠しており、アーマドとの離婚手続きも終えたマリーは、今明らかにサミールとの結婚生活を希望しているが、さてサミールの方は？

男の私に言わせれば、サミールだって、マリーが離婚の手続のためにやってきた元夫のアーマドをホテルに泊めず、家に泊めたことに釈然としないのは当然。しかも、そんな同居生活がしばらく続けば、アーマドがマリーを見る目だって、少しずつ気になるものだ。すると、そんな気持ちは自然とマリーに向かって、「なぜお前はそんな行動を？」「俺の気持ちは考えないのか？」となるのも、仕方ないのでは？しかも、マリーはアーマドとの離婚手続きが終わったらすぐにサミールと結婚できるように考えているようだが、サミールだって妻セリーヌとの離婚が成立していないのだから、マリーとの正式な結婚がムリなことは当たり前。マリーと正式に結婚するためには、植物状態にあるセリーヌと正式に離婚するか、さもなくばセリーヌが死んでしまうことが不可欠だ。

そんな中、サミールはマリーと不倫関係にあり、マリーは妊娠までしていたが、その妊娠は想定範囲内？それとも・・・？セリーヌの意識回復のためには、においの記憶が一番有効と聞き、今セリーヌの香水を集めているサミールの姿を見ていると、サミールが愛しているのは実はマリーではなく今でもセリーヌ・・・？本作ラストには、そんな問題意識にもとづく想定外のシーンが登場するので、それに注目！

## ■□このラストシーンをどう読み解く？あなたの賛否は？■□

本作は、アスガー・ファルハディ監督の『彼女が消えた浜辺』『別離』に続く注目作だけに、新聞紙上ではその評論が多い。例えば①4月25日付朝日新聞夕刊の沢木耕太郎氏の『銀の街から』、②4月25日付大阪日日新聞の高橋聡氏の『一本見るなら』、③4月18日付読売新聞の有栖川有栖氏の『映画はミステリー 142』、④4月18日付日経新聞夕刊の中条省平氏の『酷薄さ捉えるリアリズム』等々だ。

その中でも①は「これは素晴らしい作品だと思う。しかし、傑作と呼べるかどうかはわからない。たぶんその判断は、最後のシーンをどう捉えるかで分かれるだろう。物語を終わらせるための、いささか安易なラストだったのか。あるいは、人間の不思議を描くためには、そのラストこそ必要だったのか。私は一。」と書いて本作のラストシーンに注目している。また、②は「ラストシーンが希望なのか、絶望なのかは見る人が決めればいい。」と書き、同じく本作のラストシーンに注目している。私はこのラストシーンにかなりの違和感を持ったが、さて、あなたはこのラストシーンをどう読み解く？そして、あなたの賛否は？

2014（平成26）年5月9日記